語源覚え書き

河　野　庸　二

序言

著名な学者といえども時には誤りをおかす。また書物の中での語源探索の旅には自ずと限界がある。そして，かえって言語学とは直接関係のない本の中に，貴重な記述がみつかることも少なくない。筆者はまた時たま巡ってくる海外渡航のチャンスを絶好の言語資料蒐集の旅，つまり，またとないフィールドワークの機会だと考えている。したがって，実際の探索旅行はもとより，書物の中での探索も広い意味でのフィールドワークであるといえる。筆者はこれまでにも語源に関するささやかな研究を何編か発表してきたが，その後書き溜めたメモを中心に，文字どおり「フィールド・ノート」として一編にまとめたのが本編である。

ヴァン・ルーンの早とちり

オランダ生まれで，*The Story of Bible* など啓蒙的ないくつかの著作によってわが国でも知られたアメリカの著述家 Hendrik Willem van Loon (1882-1944) の著書を先年イギリス留学中 Oxford の古本屋で見つけて買い求めた。*The Home of Mankind* である。題名が示すとおり世界各地の諸国民の住むそれぞれの土地について記した，いわば歴史プラス人文地理的な内容の大著である。おそらく，有名な *The Story of Mankind* の続編として書かれたものであろうが，この本の邦訳はたぶんないであろう。ところで日本に関する章を読んでいて次のような一節に遭遇した。

> North of Osaka lies Kyoto (Tokyo is merely Kyoto turned round), the ancient capital of the Empire. (下線筆者) [1]

つまり「東京」は「京都」をひっくり返しただけだというのである。ローマ字書きをすればたしかにそうだが，こういう軽率な書き方をされると「ヴァ

ン・ルーンともあろう者が」と思いたくなる。

ラムネとマリアッチ

一見奇妙な取り合わせのように見えるであろうが，この両者には共通点がある。つまり前者は英語 lemonade が，後者はフランス語 mariage が崩れた形であり，どちらもいわゆる「耳から入った外来語」というわけである。もっとも，「ラムネ」はいうまでもなく英米人の発音を聞いた日本人がつくりだした語であるが，「マリアッチ」なる語をつくりだしたのはフランス語を聞いたメキシコ人である。おもしろいことに『外来語の語源』と銘打った辞典には肝心の「マリアッチ」の項がなく，無くもがなの「アメリアッチ」の項があって，しかもその中で「マリアッチ」を語源未詳と決めつけている。

> ameriachi 【語源】← American〔アメリカの〕＋ mariachi〔マリアッチ〕〈メキシコ・スペイン語．語源未詳〉．(2)

この「マリアッチ」に関しては『新音楽辞典』（楽語）の中に極めて信憑性の高い語源説明と簡潔で要を得た語意説明が出ている。

> mariachi （西）メキシコの民俗的アンサンブル。従来は野外パーティのダンスの伴奏をしたり，しばしば結婚式にも用いられたことから，この呼称はフランス語の〈*mariage* 結婚〉に由来すると思われる。(3)

それではなぜフランス語が入ったかという点であるが，日本人がパリのモードに憧れるように，メキシコ人もやはりフランスのはなやかな風俗に憧れたからではなかったろうか。

southpaw

「サウスポー」の語源については早くから興味をもち，いろいろな辞書，事典類に当たっていた。この語についてはかつてはかなり眉唾物の語源説が横行していたが，モリス夫妻の「語源・句源辞典」あたりから定説が確立したと思われる。さらにアメリカの詩人 John Ciardi（1916-1986)が晩年に出した *A Browser's Dictionary* の中で鋭い指摘をしてその定説を補強したと考

えるべきてあろう。

> A lefty. Originally a left-handed pitcher. By extention, any left-handed person and especially an athlete. [From the self-elaborating impulse of sportswriting that calls a baseball a *spheroid* and the home team the *local aggregate*. This one coined in 1880 's by Finley Dunne, who was then a young sportswriter for the *Chicago News*. This whimsy is based on the fact that the Chicago ball park was laid out with home plate to the west. Hence, a left-handed pitcher would be hurling the spheroid with the "paw" on his south side. But despite the self-conscious artfulness of this sort of thing , *northpaw* has never come into use.] (下線筆者)[4]

つまりチアルディは「わざともってまわったような表現をするのはスポーツ記者の常であるがサウスポーもその一例である。」と言っており，類例として「野球用のボール」を指す spheroid (回転楕円体) と「ホームチーム」を表す local aggregate (地元集団) をあげているが，これはするどい洞察である。「救援投手」を「火消し」,「外人選手」を「助っ人」などと呼ぶわが国のスポーツ記事を思い合わせると一段と興味深い。

ヨアヒムの谷とネアンデルの谷

ドイツ語の谷 Tal, Thal に関係のある「ドル」 dollar の語源なら大抵の語源辞書に出ている。但し，語源研究者の知的好奇心を満足させてくれるような説明はそうざらにあるものではない。たとえば Taler がどうして dollar になったのか，また dollar がどうして日本語「ドル」になったのかを納得のいくように説明しているものは意外に少ないのである。次に引用する記述などはよくできた部類に入るであろう。

> 語源→低独 daler <独 Taler, Thaler (ターレル銀貨) < Joachimstaler チェコスロバキアの町，現在の Jachymov 。参考A江戸時代末期には英語の dollar をオランダ語風に発音してドルラルといった。[5]

> Today the dollar is generally regarded as the basic unit of U. S.

currency, but it was actually in existence, in one form or another, at least a century before the first Pilgrims landed at Plymouth. Very early in the sixteenth century, the Bohemian Count of Schlick set up a mint in the pictuaresquely named Dale of Joachim or Joachimsthal. He began issuing silver coins dedicated to Joachim, better known to us as Joseph , husband of the Virgin Mary. The coins were called "Joachimsthalers," which soon was shortened to "thalers." The Dutch took to calling them "dalers." from which comes the English *dollar*.[6]

一方，同じくドイツ語の「谷」にまつわる「ネアンデルタール」についてはどうであろうか。ネアンデルタール人のことなら大抵の辞書に出ている。しかしながらそれはあくまでも人類学に関する記述であって，この化石人類が発見された土地の地名の由来などひとこともふれていないのが普通である。ところがつい先頃，科学雑誌『Newton』の1992年10月号所載の記事「消えた人類ネアンデルタール人」の「ネアンデルタール人の発見」の章の冒頭に次のような注目に値する一節があった。

ライン川の支流のデュッセル川をさかのぼると，ネアンデルという谷にたどり着く。17世紀，ここにヨアヒム・ノイマン（Neumann, Newman, 新人）という地方詩人が住んでいた。彼は少し気取って，自分の名前をギリシア語風に「ネアンデル（Neander)」と称していたそうだ。それでいつしか人々は，この谷をネアンデルタール（Tal, 谷）とよぶようになった。[7]（筆者注：つまり neos(new)＋ andros(man)である。）

現地に居住する人たちにとっては周知の事実かも知れないが，"the rest of the world" にとっては案外知られていない事柄である。しかも直接英語の dollar と関係のある Joachimstal の場合と異なって語源学的にとりあげられることが稀である。そういう意味でこれは貴重な記述だと思う。

日本語としての pantalon

パンタロンといえばフランス語でズボンのことだが，日本では女性用の，特に裾の広がったものを指しているようで，それには次のような事情がある

らしい。雑誌『言語』の1993年10月号に「象の脚型ズボン」と題するEssayが出ている。そしてその筆者の肩書は服飾研究家とある。

> サボが再び流行していると書いたが，実は再び流行の気配をみせているのは，サボだけではなくこの七〇年代風のデコントラクテなモードそのものだ。
> したがって当然のことながら，裾へ向って広くなっているズボン，即ちらっぱズボンも流行する。このズボンは七〇年代を知る人達にとってみれば「パンタロン」と呼んだ方がイメージが鮮明に浮び上るにちがいないあのズボンである。このズボンや，パッチワークの長いスカートにサボと呼んだあげ底の靴やサンダルをはいていた。
> 　このズボンのことは当時も今もパンタロン・ア・パット・デレファンpantalons à pattes d'éléphantとフランスで呼ばれている。それがなぜか，日本では七〇年代に「パンタロン」だけが切りとられ，後の部分が省略されて使われた。今でもある年代以上の人は，パンタロンといえばあの裾広がりのズボンのことだと思っているが，日本独自の用法である。しかし，あの時正確な訳語，たとえば「象の脚型ズボン」という用語などがあてられていたとしたら，あれほど流行しなかったかもしれない(もちろんそんなことはないだろうが)。(8)

こういうことがらは筆者が服飾研究家だからこそ，――何度もフランスに行っている人だからこそわかることなのである。フランスのファッション界の事情など知るすべもないわれわれにとって，そういう意味でまたとない耳寄りな情報だと思った。

nappa cabbage と Napa cabbage (「白菜」の英語名をめぐって)

筆者は1988年夏南カリフォルニアのサンディエゴ近郊のビスタ（Vista）の地でホームステイする機会に恵まれた。ここもやはり文字どおりの車社会でどこへ行くにもhostかhostessに頼りっぱなしであったが，日本食を紹介したりする都合でその材料仕入れのため，フードストア（このあたりではスーパーマーケットのことをそう呼んでいた）にはたびたび連れて行ってもらった。食品――特に肉の安さにも驚いたがそれはさて置き，一番印象的だったのはキャベツの隣にまぎれもない白菜が並べてあり，しかもその

name tag に nappa cabbage と記されていたことである。この呼称から白菜のアメリカに渡来した経路が一目瞭然であると思われたし，「菜っ葉」という日本語における葉野菜，殊に白菜の俗称に思わぬところで遭遇したことを愉快に感じた。ちなみにその翌年イギリス留学の際に滞在したロンドンでは白菜は Chinese leaves であった。英国の場合白菜は日本を経由することなく直接中国からもたらされたことはほぼたしかであろう。（ついでながらドイツでは「ヒナ・コール」〈 China Kohl 〉というそうである。）なお，研究社の大和英によれば， Chinese cabbage または white rape とある。辞書に出ているくらいだから，現在は使われていなくても，かつてはこれらの呼称が行われていたことは事実であろう。参考までに往時学生の間に人気のあった大正期のベストセラー，井上十吉の大和英辞典を調べてみると，同書にはまだ「白菜」の項はなく，「油菜」の項に the Chinese cabbage, the rape, the Shanghai oil plant, pak-choi とある。最後の pak-choi は中国語〈白菜〉の発音を移したに違いない。

ところが今年の夏筆者はテネシー大学マーチン（ Martin ）校で海外研修をする学生の引率者として渡米し，初めてアメリカ南部で 3 週間をすごす機会に恵まれた。マーチンは「市」とはいうものの人口わずかに 1 万足らずで，農地といえば大豆畑と家畜の飼料用のトウモロコシ畑ばかりという純然たる田舎である。大きなフードストアといえば Excel というスーパーが一軒だけであった。そしてそこの野菜コーナーでは白菜は何と napa cabbage の名で売られていた。（もっともその英語は大文字で書かれていたであろう。）但しこの時点ではただ直観的に「カリフォルニアからテネシーまで伝播する過程で p が一つとれたのだな」と思っただけであった。そのうちマーチン校のスタッフとも親しくなり，中でもメンフィス出身でかつて南カリフォルニアにも住んだ経験のある日本通の Dr. Jim Kee （学生は彼から医学英語を教わった）とは折にふれて日英の言語事情についても話し合う機会があった。そもそも初対面の歓迎会の席で次のようなやりとりがあったのである。

"Several years ago I experienced a home stay at a rural area near San Diego. "

"Where? What's the exact place name?"

"Vista. Have you heard of that?"

"Yes, of course . I once lived in Escondido myself. "

"Oh, I know the place name very well. That means 'hidden' in Spanish, doesn't it?"

" 'Hidden place', yes. And what about Vista? Do you know?"

"Yes, 'good scenery'."

"Exactly. 'Fine view'."

そんなわけでKee氏はどうやら筆者をちょっとした南カリフォルニア通と見込んでくれたようだった。

その後スタッフの一人の宅でのささやかなパーティーの席で同氏と再び向かい合ったとき，いよいよ白菜のことが話題にのぼった。キー先生は自宅の菜園で日本のキュウリやナスを植えている人なので，それは自然のなりゆきであった。

"I noticed 'nappa' cabbages in southern California, but here in Tennessee you call them 'napa' cabbages, right?"

"Yes, one 'p'. They were introduced from California, I think."

"You know 'nappa' is a Japanese word meaning 'leafy vegetable' in general?"

"Oh, really? I didn't know that."

そのときは何とも思わなかったが，日本に帰ってから，帰国前の3日間観光を楽しんだサンフランシスコでもらった観光案内のパンフレットを何気なくめくっていて，北カリフォルニアにNapaという地名があることにふと気がついた。このときになってはじめてキー氏の言葉の意味が分かったのである。事実彼は北カリフォルニアの地名Napaを知っていたが，その反面「菜っ葉」という日本語を知らなかったのである。だから仮にかつて住んでいた南カリフォルニアでnappa cabbageという名称を知っていたとしても，むしろその後テネシーで知った呼称Napa cabbageの方が正しいと思っていたのであろうことは十分想像がつく。つまりジムは白菜を北カリフォルニアのナパ原産の野菜と思っていたのである。

現地に舞い戻って実地に調査することもすぐには出来ないので当座は推測するしか方法がないが，文明の利器を活用して，当地でお世話になった国際企画部のDeanであるJohn A. Eisterhold博士にファックスで問い合わせてみたところ，早速返事が来た。

Thanks for your fax. I really enjoyed reading it and learning about things at Yamaguchi University.

The Napa Valley (the California spelling) is a major wine and
ママ

vegetable area near San Fransisco. Of course, many Japanese lived in that area, and many were small vegetable farmers. I will try to find out if there is any connection. I will try to find out before we come.

When we say Napa cabbages, we are referring only to the area where the cabbage comes from, just as we refer to "Florida oranges," or "Mexican strawberries". That is important because we associate Florida with the best oranges (as opposed to California oranges) . We associate Mexico with very early strawberries, though they are not so good.

I hope this has been a little helpful. If I can find out anything on the national origin of "Napa" (Nappa) , I'll let you know. I think it is, however, highly probable that it is from the original Japanese word.

Dr. Eisterhold のファックスが伝えてくれた耳寄りの情報は,「サンフランスからほど遠からぬナパの地には日系人も多く住んでいて，しかも彼らが小規模に野菜類を栽培していた」という事実である。一方あまり承服できないのは,「Napa cabbage の〈ナパ〉はフロリダ・オレンジ，カリフォルニア・オレンジなどと同様に産地を表すにすぎない」というくだりである。もしそうだとすれば Napa cabbage は「ナパ産のキャベツ」ということになるが，キャベツと白菜の違いは歴然としているのだから，この考えが当てはまらないのはいうまでもない。同時にまた Dr . Eisterhold が白菜を知らない公算も大きい。決着は結局ドクター・アイスターホルドの来日（11月中旬）まで持ち越しということになった。

＜後記＞

果たせるかな来日したアイスターホルド氏は「白菜」をご存じなかった。「どんな野菜か」ときかれて，筆者は『原色牧野植物大図鑑』を出して見せた。一方，昨年アメリカに留学した同僚の松村澄子助教授（生物学）も現地で nappa cabbage という名称を見聞している。同助教授は「＜菜っ葉＞というのは葉野菜の総称なのにおかしいな」と感じたそうである。

注

(1) Hendrik Willem van Loon, *The Home of Mankind*, George G. Harrap & Company Ltd. 1933

(2) 吉沢典男／石綿敏雄，『外来語の語源』（角川小辞典），角川書店，昭和54年

(3) 『新音楽辞典』，音楽之友社，昭和52年

(4) John Ciardi, *A Browser's Dictionary*, Harper & Row, 1980

(5) (2)に同じ

(6) William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, Harper & Row, 1980

(7) 馬場悠男，『Newton』1992年10月号，教育社

(8) 深井晃子，『言語』1993年10月号，大修館書店

Out of My Etymological Field Notes

Yoji Kawano

Even distinguished scholars sometimes make mistakes. And books on etymology have their own limitations. On the contrary, we often find valuable informations in books and magazines of quite other fields. The author regards overseas travels as rare opportunities of hunting for linguistic data. Thus, the quest for the origins and derivations of words and phrases in books as well as in actual travels might be called a field work for etymologists. The present thesis starts with pointing out a defective description in a book written by a world-famous author, but chiefly deals with the true derivations of such words as mariachi, southpaw, Neandertal, pantalon (as a Japanese word) and nappa (or Napa) cabbage.